



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈沈黙〉のオートエスノグラフィー：「サイレント・アイヌ」におけるサバルタン化のプロセスとポストコロニアル状況〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	石原, 真衣
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13279号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72198
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Mai_Ishihara_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 石 原 真 衣

審査委員	主査	教授	小 田 博 志
	副査	教授	村 田 勝 幸
	副査	准教授	笹 岡 正 俊
	副査	教授	加 藤 博 文（アイヌ・先住民研究センター）

学位論文題名

〈沈黙〉のオートエスノグラフィー

—「サイレント・アイヌ」におけるサバルタン化のプロセスとポストコロニアル状況—

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は文化人類学の分野におけるポストコロニアル理論を踏まえた先住民族研究に位置づけられる。しかしそうした既存の分類に収まりきらない独創性を有する内容となっている。それが可能となったのは、これまで調査研究の「死角」に陥り、沈黙の状況に置かれてきた存在に、著者が光を当て、発話を可能にする概念枠組みを、本論文において手探りで組み立てたからである。ここで沈黙の状況に置かれてきた存在とは具体的には、アイヌと和人の両方の出自を持つが、自らをアイヌであるとも和人であるとも捉えることができない人々である。このような人々を著者は仮に「サイレント・アイヌ」と名づける。このように社会的に不可視化された存在を、旧来のアイデンティティ論やエスニシティ論の枠組みで分析することはできない。そもそもこれまで研究の「対象」とすらされてこなかった存在を研究する企てに、著者は自分自身を事例として取り組んだ。この前例のない問題設定から出発する研究を学術論文として形にしたことにまず本論文のオリジナルな価値が認められる。

次に評価される点は実証的な側面である。著者は自らにしかアクセスできない曾祖母・祖母・母・自身の4世代のファミリーヒストリーを綿密に辿り、詳細に記述した。これだけの長いスパンでアイヌ出自の家族の歴史を、一次資料に基づいて明らかにした例はほとんどない。そのため本論文は記録・資料としても価値が高いものとなっている。

このファミリーヒストリーの再構成は、著者自らが「サイレント・アイヌ」となったことを解き明かすために必然性のあるアプローチであった。つまりそれは自身の社会的な位置が、どのように歴史の中で構成されたのかを辿り直すという作業であった。さらに、あたかも「透明人間」のように認識の死角に位置するため、研究者の視野にも入ることがなく、何か語ったとしても既存のカテゴリーに収められてしまう「サイレント・アイヌ」という存在のありようを、その当事者として解きほぐすために著者はオートエスノグラフィーという方法論を採用する。オートエスノグラフィーとは、ある状況の当事者が、自らを含む状況を描き出し分析する方法論である。その際、著者は単に「主観的」な自己記述に終始するのではなく、これを自己の位置を周辺化する社会構造を逆に照射し、知的かつ公共的な議論を可能にする理論枠組みを構築するための方法論として刷新している。この方法論的先駆性によって本論文は今後参照されることになるだろう。

次いで、本論文の理論的な独創性であるが、著者は自らの位置を説明する手がかりを、まずポストコロニアル理論におけるサバルタン論に求める。ガヤトリ・スピヴァクはサバルタン概念を、植民地主義的な支配構造の中で劣位に置かれ発話できない、発話したとしてもその声が聞かれない存在を指すために用いた。著者はスピヴァクによる「社会構造にアクセスできない人々」というサバルタンの規定に注目する。そしてこれとイギリス社会人類学における分類論とを接合し、社会的な分類体系から外れる死角と、そこに陥った存在を説明する理論枠組みを、メアリ・ダグラス、ヴィクター・ターナーの議論を参照しながら形成していく。明治以後の北海道における、植民地主義的・同化主義的状況の中で、世代間で「アイヌであること」の継承が忌避され、また

同世代の間でも「カミングアウト」が回避される、このような「縦と横の分断」によって、アイヌと和人の出自を持つ者は既存の民族的分類構造のはざまに陥り、自らについて語る言葉を失う。このように、ポストコロニアル論と社会人類学的な分類論とを結びつけ、それと対話させながら、当事者である自己を説明する枠組みを言語化したことに本論文の重要な理論的達成がある。

・学位授与に関する委員会の所見

これまで述べてきたように、本論文は文化人類学、ポストコロニアル論、先住民族研究などの研究領域において高い学術的な意義を有しており、それは第3章と第6章がそれぞれ査読付きの学術誌に掲載されていることから明らかである。また私たちの研究科で今後増えていくであろう、アイヌ・先住民出自の当事者による学位論文の先駆的な里程標としても引用されることになるはずである。これに付け加えたいことは、本論文が学術的な水準を保ちながら、人間の痛みに共感し、自発的で血が通った表現でつづられた「作品」というに相応しい完成度を示していることである。さらにこのような作品が、歴史文化論講座からの事実上最後の学位論文として提出されたことである。歴史文化論講座は歴史学と文化人類学の学際的な協働の場として設立されたが、その理念を体現する論文がここに結実したことは非常に喜ばしい。

その一方で、「サイレント・アイヌ」の属性をもつ人々が実際にはどれくらい存在するのか、そして本論文で述べられた知見がどこまで一般化できるのかの検証は残された課題となっている。しかしこの課題は重要ではあるが、実際にはそのような人々は極めてアクセス困難であり、また事例から理論枠組みをボトムアップに構築するというエスノグラフィーの方法論の点から言っても、本論文の学術的な意義を損なうものではない。よって審査委員会では全員一致で、著者に博士（文学）の学位を与えることがふさわしいとの結論に達した。